平成 26 年度　被災文化財復興展

救出された双葉郡の文化財Ⅲ

（平成２６年１０月４日発行）
展示期間　平成２６年１０月４日（土）
～平成２７年１月１２日（月）
会　　場　まほろん特別展示室
（福島県文化財センター白河館）
〒961-0835
福島県白河市白坂一里段 86
ＴＥＬ　0248-21-0700（代）
ＦＡＸ　0248-21-1075
ホームページ　まほろん　検索

展示の開催にあたって

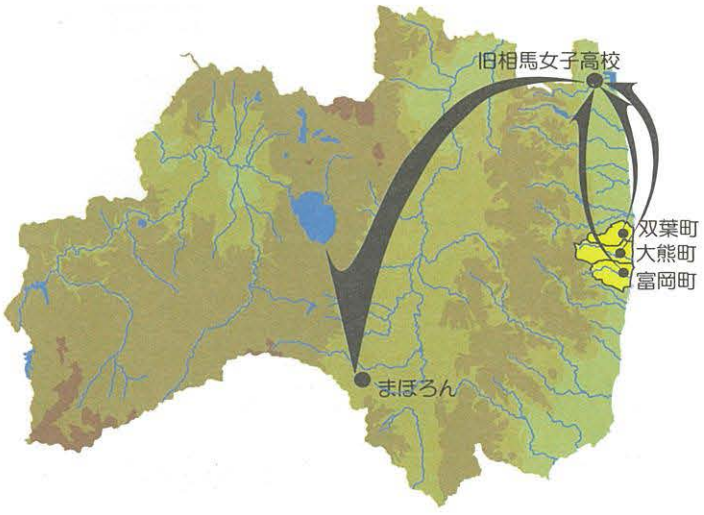
「被災文化財復興展」は、東日本大震災と原子力災害によって被災した双葉町歴史民俗資料館・大熊町民俗伝承館・富岡町歴史民俗資料館から救出された文化財を公開し、復興に向け、双葉郡の文化と歴史的風土をお伝えする企画です。

第３回目となる今回は、会場を「くらしと生業」、「歴史と遺産」、「記憶と記録」に分け、世代を超えて受け継がれてきた３町の歴史と伝統を紹介します。

文化財レスキューと被災ミュージアム再興事業

原子力災害の影響は、双葉町・大熊町・富岡町の各資料館にも及び、全町避難とインフラの消失により、資料の安全な管理が困難となりました。そこで、３町の文化財担当者と国・県及び関係機関が一丸となって協力し、平成 24・25 年度文化財レスキュー事業によって各資料館から収蔵資料が搬出されました。この救出資料は、まず、相馬市の旧相馬女子高校校舎内に一時避難しました。

文化財レスキュー事業で救出された各館の資料は、被災ミュージアム再興事業に引き継がれ、点検・記録などの整理作業を経て、まほろんの敷地内に建てられた「仮保管施設」に収納されています。東京文化財研究所・福島県立博物館による環境調査や指導を受けながら、救出資料の適正な管理に努めています。



被災資料の搬出作業（富岡町）

まほろんでの整理作業

双　葉　町

３町のうち、最も北側に位置する双葉町は、昭和 26 年に新山町と長塚村が合併して標葉町となり、昭和 31 年に改名して現在の町名となりました。震災前の双葉町は、約 7,000 人の人々が暮らし、花や野菜などの園芸栽培が盛んな地域でした。

双葉町の花は桜で、双葉町章とともに「双葉ダルマ」のデザインに用いられています。双葉町ダルマ市は、長塚商店街で開かれる新春恒例の風物詩で、毎年、ダルマを買い求める人々でにぎわいました

双葉町歴史民俗資料館は、JR 双葉駅から南西へ徒歩で約５分の所にあります。開館は平成４年で、ベージュと白の外壁が美しい資料館です。常設展示室には、国指定史跡・清戸迫横穴壁画の精密な実物大模型があり、来館者の目を引きました。

双葉町歴史民俗資料館

大　熊　町

双葉郡のほぼ中央に位置する大熊町は、大野村と熊町村が昭和 29 年に合併して誕生しました。震災前の大熊町には、約 11,500 人の人々が暮らしていました。

大熊町のマスコットキャラクターは、可愛い２匹の熊で、特産の梨・キウイフルーツ・鮭を抱えています。熊川の鮭漁は県内でも有名で、漁の最盛期となる 10 月末頃は、鮭簗場に多くの観光客が訪れました。

大熊町民俗伝承館は、JR 大野駅から南西へ徒歩で約３分の所にあります。開館は平成８年で、お洒落な時計台がシンボルの資料館です。館内には、昭和初期の民家や道具が展示されており、大熊町の小学生が昔の生活の様子を学ぶ場としても利用されていました。

大熊町民俗伝承館

富　岡　町

３町のうち、最も南側に位置する富岡町は、昭和 30 年に旧双葉町（旧上岡村が町制施行して改称）と合併して現行の町域となりました。震災前の富岡町には、約 16,000 人の人々が暮らしていました。

町の木・花は、桜・ツツジで、夜ノ森公園の桜トンネル、JR 夜ノ森駅構内のツツジは町の自慢です。また、毎年８月 15 日に行われる「上手岡麓山神社の火祭り」は、福島県の重要無形民俗文化財に指定されており、若者が松明を担いで麓山の頂上まで一気に駆け上がる勇壮な神事です。

富岡町歴史民俗資料館は平成 16 年に開館し、役場に近い富岡町文化交流センター“学びの森”内にあります。古瓦が出土した小浜代遺跡や幕末～明治時代に操業した滝川製鉄遺跡などの資料が有名ですが、収蔵庫や埋蔵文化財の整理室などバックヤードを積極的に公開する施設としても知られていました。

富岡町歴史民俗資料館

くらしと生業

双葉町・大熊町・富岡町の各資料館から救出された文化財には、この地域のくらしと生業の移り変わりを知るための多数の資料があります。

今回の展示では、「双葉ダルマ市」のために地元で製作されたダルマや、かつての町場の賑わいを伝える商店の「引き札」、その他の商業用具と流通の記録、養蚕用具や漁具などの生業用具などを通して、この地域のくらしと生業の一端を紹介します。

双葉ダルマ（双葉町）

双葉地方を代表する新春行事「双葉ダルマ市」は、もとは旧正月13日に、近年は新暦の1月第2土・日に双葉町長塚の商店街を中心に開催されてきました。三春・いわき・高崎など、他地域のダルマも多く出されましたが、近年は双葉町のマークや太平洋をイメージした青色をあしらったオリジナルの双葉ダルマも売られるようになっています。

桑かご

ワラダ

桑扱き

回転マブシ

養蚕用具（大熊町）

福島県は、古くから良質な蚕種の産地として全国的に知られ、特に近代以降は、農家の副業として養蚕が広く奨励されました。双葉地方でも、かつて蚕を飼育していた農家は多く、蚕が桑の葉を食む音が子ども時代の思い出という人も多いでしょう。桑の葉を取る桑かごや桑扱き、蚕を飼うワラダ、蚕に繭を作らせるために使う回転マブシなどの養蚕用具は、現在は廃れてしまった養蚕の姿を伝えるものです。

歴史と遺産

ここでは、考古資料から古代における双葉郡の歴史の一端を紹介します。大化の改新以前、現在の双葉郡は、おおよそ染羽国から石城国と呼ばれた領域と重なります。ここでの国とは、大和朝廷によって「国造」に任命された地方豪族が納める領地のことで、国造制という支配体制は、7世紀初めまでに成立したとされています。

このころ、双葉郡を含む浜通り地方では、壁画を描いた横穴墓も造られます。双葉町の国指定史跡・清戸廹76号横穴墓の壁画は、渦巻文のほか、人物や騎馬、狩猟の様子などが確認されます。狩猟が軍事訓練を兼ねていたという見方もありますが、騎馬の姿は、後の「野馬追」を彷彿とさせます。

清戸廹横穴古墳壁画（双葉町）

清戸廹76号横穴墓は、昭和42年に発見されました。渦巻文の右側で、片手を上げて立つ人物は、この横穴墓の被葬者とも言われています。震災前は、壁画を保護するために墓の覆屋が整えられ、特定の公開日にはガラス越しですが壁画を見学することができました。

高松塚古墳のカビなどによる壁画の劣化が大きな問題になったことは記憶に新しいですが、震災後も今のところ清戸廹76号横穴墓ではカビなどの劣化は確認されていないとのことです。

大化の改新以後、支配体制は、国造制から律令制へと変わります。律令とは、今でいう法令のことです。行政区画も改められ、国造制で「国」と呼ばれた範囲が律令制では「郡」になります。染羽国・石城国も幾度かの変更を経て、標葉郡・楢葉郡となりました。明治以降の双葉郡の名称は、この２郡に由来します。およそ双葉町・大熊町は標葉郡、富岡町は楢葉郡に属していました。

各郡には「郡衙」という役所や寺院が置かれましたが、その権威を示すため瓦葺きの建物でした。双葉町の郡山五番遺跡と富岡町の小浜代遺跡から古代の瓦が出土しており、郡山五番遺跡が郡衙推定地、小浜代遺跡が寺院跡などの可能性が考えられています。

郡山五番遺跡と小浜代遺跡（双葉町・富岡町）

郡山五番遺跡は、JR 双葉駅の南西約２㎞の地点にあります。昭和 52 ～ 54 年度に発掘調査が行われ、大型の建物跡が確認されました。出土した瓦は奈良～平安時代のもので、瓦の文様から南相馬市原町区の京塚沢窯跡で生産された可能性があります。

小浜代遺跡は、JR 富岡駅の北側約１㎞の地点にあります。昭和 44 ～ 46 年度に発掘調査が行われ、奈良時代の瓦や奈良三彩片などが出土しています。小浜代遺跡の性格は、寺院や官衙跡などの可能性が考えられています。

（写真は、左が郡山五番遺跡、右が小浜代遺跡の軒丸瓦です。）

記憶と記録

双葉町・大熊町・富岡町の各町では、町史編纂事業をはじめ、地域の歴史と文化を記録していく様々な試みが行われてきました。

例えば、ムラでの重要な事柄を記した区有文書や、個人の事績を伝える算額、その他の史料、写真や映像などは、その時代における地域の「記録」として重要な資料です。

また、これらの記録類は、この地域で暮らしてきた人々の「記憶」とも深く結びついています。これらの「記録」を通して、生まれ育った地域での「記憶」を呼び起こされるという人も多いでしょう。

３つの町では、東日本大震災と原子力災害の直後から、住民が県内外への避難を強いられています。大震災から３年半が経過した今、長い歴史とともに培われた歴史と文化、さまざまな地域の「記憶」そして「記録」を、どう残し、伝えていくかを、私たちは考えていかなければなりません。

相撲の化粧まわしと軍配（双葉町）

双葉町歴史民俗資料館の収蔵資料には、地域で行われた化粧まわしや行事道具などがあります。双葉町では太平洋戦争前まで、神社の祭礼などで草相撲が盛んに行われ、周辺地域からも力自慢が集まりました。太平洋戦争を境に衰退しましたが、四股名が刺繍された華やかな化粧まわしや軍配などからは、かつての村祭りの賑わいが偲ばれます。

復元された算額（富岡町）

日本で独自に発達した数学を和算と言います。算額は和算家が研究成果を神社等に奉納した絵馬で、福島県は全国的にも算額が多いことで知られます。

富岡町小良ケ浜の和算家によって、明治 26 年（1893）に地元の赤坂神社等に３点の算額が奉納されましたが、いずれもその後に焼失し、昭和 58 年に復元されました。